

川越先生と坂野登君と全校マラソン

鬼木 甫

2017年6月8日

「十年を一昔と言えば...」で始まるモノクロ時代の名画があったが(*)、これで数えると、この話は五昔、六昔にさかのぼる。

熊本高校4回生、1952年(昭和27年)卒業のわれわれは、「四江会(黄民雄会長)」と名付けた同窓会を持ち、毎年1回熊本市で集まっている。本年5月にその支部である「関西四江会(宇野(村本)貞一会長)」が京都で開かれた。「あれはきつかったばい」と話題になったのが、当時の全校マラソンである。すでに廃止されて久しいようだが、われわれ在校時には、全校生が毎年1回10キロ(中2まで)、15キロ(中3と高校生)のマラソンに参加していた(**)。コースは、当時の旧校舎(***)を出発して水前寺公園の脇を抜け、江津湖の土手道を南に向かって走る。10キロコースは上江津までで右折する近道を通るが、15キロコースは下江津の先端まで行く。現在の地図で見ると、その後加勢川に沿ってゆるやかに西北に転じ、当時田迎の往還と呼んでいた道路(****)を経て国府・大江方面に戻るのである。出発直後から駅伝部の選手がトップに立ち、一般の生徒は長い列に伸びてコースを走り、ばらばらにゴールの校門に戻るという具合であった。戦後の貧しい経済環境の中で自動車の往来もなく、道路の真中をのびのび走っていた。

同窓会写真(*****)の中央にいる黄民雄四江会会長に抱かれている遺影は、体育の川越竇輔先生(ごえさん)である。川越先生は元駅伝の選手でもあり、全校マラソン行事の推進役だったと思う。体育担当には「こわもて」の先生が多かったが、川越先生は小柄で生徒に向かって大声を上げることも少なく、それでいて生徒をよく把握しておられた。筆者の中学1、2年のときの体育の授業が、この川越先生であった。

当時は体育館も無く、雨が降れば屋外の体育は休みで、仕方なく教室での授業になる。川越先生は話し上手で、雨天授業でも生徒に耳を傾けさせていた。「駅伝で走るときは、他校の速い選手を見つけ、その直後に付き、足並を揃えて走る。相手は付かれるのを嫌い、こちらが小柄なのを見て、ポーンポーンと大股に走ってペースを乱そうとする。わしは小柄だからそのまま付いてゆけないが、その代わりに歩幅を狭め、相手の1歩をこちらの2歩としてペースを揃え、付いてゆくんじゃ。」のような具合であった。また身体を鍛えること、よく走ることを強調し、その反例として「世の中には気の毒な職業がある。仕事の性質からどうしても弱い身体になってしまう人達だ。その職業を『ダンセン業』という。うちわや扇子を作る仕事だが、一日中座っていなければならない。その上、のり付け

する紙が動かないように、ずっと息づかいを細くしていなければならない。こういう仕事を続けていると、身体が弱くなってしまふ（ので気の毒だ。」後にダンセン業とは団扇業と書くのだと分かったが、川越先生は現在で言う心肺機能を高めることを強調されていたのだと思う。そして先生は自身でも、平成19年まで92歳という長寿を保たれた。

その全校マラソンだが、筆者には自慢話とお礼話がある。元来小生は走ることが苦手で、小学校以来運動会の徒競走はいつもビリ近く（どごべす）であった。熊本中学で初めて全校マラソンに参加したときも、最初は全く期待せず、のんびり走って順位も350番とか後ろの方であった。しかし途中で疲れて歩くことはなかった。2回目か3回目だったか、途中でペースを上げて他人を抜くことを試み、どうということもなくゴールした記憶がある。順位はそれでも200番台で、次の年はたしか127番まで上がった。何回か経験するうちに、自分は短距離は苦手だが、長距離を走ることではそれほど劣っていないこと、また何百人というマラソンではスタート時の対応が順位に大きく響くことが分かってきた。大勢で運動場から校門を出るので、どうしても肩を触れ合う、押し合うことになってしまう。そのとき遠慮して他に譲っていたのでは、一瞬のうちに何十人も抜かれてしまい、後にレースの列が細長くなってから抜いてゆくことは至難である。

そこで高校3年の最後のマラソンのときは、スタート時に意識して前に出ることを決め、狭いところでも他に譲らず、肩が触れ合ったらぐいと力を入れ、他を押しつけて走ることを実行した。しかし水前寺横を通り、江津湖脇の道路に出て列が長くなったときは、前にも後にも大勢いて、何番くらいを走っているのか全く分からない。前年までは江津湖の景色を眺めながら走っていたが、その年は少しでも前に出ようと意識していたと思う。中間点にあたる下江津湖の先端では、体育の山形利孝先生が「頑張れ」と声を掛けてくれた。

帰り途の田迎往還に入ると道幅が広がる。そこで1人、2人と抜きながら走り続けていると、後ろから中学3年のクラス（山形先生担任）で一緒だった高田登（現在は坂野登）君が追い付いてきて、「一緒に走ろう」という。うなずいて併走し始めたが、彼のペースは格段に速く、ごぼう抜きにしてゆく。間もなく当方も疲れて、「とても駄目だ、先に行って」と言うと、彼は「いやいや」という風に首を振り、ペースを落とす。やむを得ず当方も何とか走り続ける。これを何回か繰り返したが、高田君はとうとう最後まで当方を置いて先に行くことをしなかった。

この高田登君には、同学年では誰知らぬ者ない「武勇伝」がある。今回の京都同窓会でもそれが繰り返し話題になった。すでに広く知られていると思うので、かいつまんで述べ

るが、それは高校2年夏の水泳大会である。当時、スタートから呼吸をしないで何メートル進めるかを競う潜水競技があった。高田君はこれに出場し、無呼吸を頑張り続けてなんと水中で気を失い、プールから三途の川を渡りかけたのである。もちろんすぐ近くにいた駅伝部の永田信也君他数名が飛び込んで抱え上げ、「しっかりしろ」と大声で呼びかけ、プール脇に横たえた。結果事なきを得たが、この件で彼の勇名は全学年に広がった。しかしその翌年、水泳大会プログラムから潜水競技の名が消えていた。

全校マラソンで小生に声を掛けたのが、この「カンナシ」頑張り屋である高田君だったのである。小生は少しだけ、これは大変なことになった、この頑張り屋にはとても付いてゆけない、との気持ちもあり、「先に行って」と逃げるのだが、彼の方では「ではお先に」とは言わず、少しペースを落として一緒に走ってくれる。こちらも、「では歩くから」と言って併走をやめるような失敬なこともできず、それこそ全力を尽くして一緒に走ったことである。レースの後半で何人抜いたのか覚えていないが、10人や20人では済まなかつただろう。正直なところ、小生にはこの時ほど体力を振り絞った経験がない。コース最終近く、国府の住宅街の細い道に化学の広島先生（しゃもじ）が、応援に立って居られたことを覚えている。

そして校門の前にある100メートルほどの道路まで戻って来た。ゴールは前方に見える校門であり、ここがラストスパートの掛けどころである。正直、これまで引っ張ってくれた高田君に対してラストスパートを挑むのは失礼になると思い、様子をうかがったが、彼の方ではスパートする気配がない。そこで当方は、「恩知らずだが、スポーツ精神ということもあり、構わないだろう」と一瞬考えて前に出た。しかし途端に高田君も走り出し、小生を大きく抜き去って校門に達した。終わってみると小生の順位は、「夢かと思う19番」であり、彼は18番であった。その折、小生の担任であった遠山嵩先生が校門の脇に居られ、「鬼木、よかったな」という具合で、もともとしわの多い「仏」顔をさらにくしゃくしゃにして喜んでくださった。そのときはたぶん20位までが入賞で、19位の賞品は「歯みがき粉」だった。茶色い小さなハترون紙封筒の中にビニール（セロファンだったかも）の袋があり、外から触ると柔らかく、何かと思って封を開き嗅いで見て「歯みがき粉」だと分かった(*****)。卒業生の中に後援する会社か店があつて、賞品を寄付してくれたのだろう。

レースの後には疲れ切っていたのだろう、高田君には何も言わずに過ぎ、これが小生の心に負担として残った。実際もし彼が小生に併走していなかったならば、間違いなく順位を上げ、18番どころか1桁以内に入っていたかもしれない。また小生の順位はずっと下

で、歯みがき粉を賞品にもらうこともなかっただろう。思えばその直後か、その少し後にも、きちんとお礼を言うべきだったのだ。しかしまだ未熟な高校生で、「改めてお礼を述べる」行動が身に付いていなかった。卒業後に何度か思い出しては、しまったことをしたと後悔していた。その結果この経験を現在まで記憶しているのかもしれない。

ところで京都の同窓会には当の高田（坂野）登君も出席していた。小生は席上で、上記全校マラソンの経験を、同君の名を出さないまま「話の主人公はこの中にいるから、途中で自分のことだと思ったら手を挙げてくれ」といってスピーチしたが、最後まで誰も手を上げない。当の高田君も他と一列にきょとんとしている。最後に名前を明かすと、何と「全く記憶がない」とのことである。しかし考えてみれば、これは「六昔の片思い」であって、忘れてるのは当然である。また親切にされたことはよく覚えていても、親切にしたことは忘れるものである。同窓会の数日後に、その高田君から会合の写真を添えたメールが来て、「貴兄が話したマラソンのことを教えてほしい」とのことである。そこで川越先生のこと思い出しながら綴ったのがこの文章である。

(*) 木下恵介監督、高峰秀子主演「二十四の瞳」松竹映画、1959年。

(**) 当時は戦後の六三三四学制改革が進行中で、旧制熊本中学を改編してできた（新制）熊本高校に、旧制入学者のための中学校が併設されていた。

(***) 現在の高校敷地の西北にはほぼ隣接する旧陸軍十六部隊跡地、現在は熊本県立劇場等になっている。

(****) 「田迎の往還」は、現在の県道104号線であろう。

(*****) 「平成29年度」関西四江会」写真

(*****) 歯みがき「粉」とは、戦中・戦後に使われた「チューブ入り歯みがきの代用品」であり、歯ブラシを少し湿らせ、歯みがき粉を付けて歯に当てるのである。

写真説明： 黄民雄四江会会長（中央川越先生の遺影を持っている）、向かって右隣が宇野貞一関西四江会会長、後方右端が坂野（高田）登君、その左隣が筆者。

追記（2017年8月28日）

本文を書き終えて、坂野君に加え同窓会出席者数名にメールで送付したところ、藤田早苗君、寺本譲君から返信が来た。藤田君からは「川越先生の遺稿があるが、読みますか」とのこと、郵送してもらった。厚手で重みのある封筒を開くと、『君達に出会えて幸せ

だった』という題で何十ページかの長い「遺稿」である。

川越先生について当方は中学1、2年の体育授業を受けただけで、個人的にお話ししたのは記憶している限り2回のみである。しかし在学6年を通じ小生にとって、「広く生徒との連携が深く、人間的な幅があって気になる先生」であった。藤田君から送って貰った「遺稿」を読んで、川越先生についての小生の記憶は何倍にも増幅され、かつ一変した。幼時からの生い立ちや教師時代の苦労、そして野球部長としての努力については、「遺稿」自体を読んで貰うのが一番の近道である。「遺稿」の成立に尽力されたと察せられる藤田君の了解を得て、この「遺稿」をなるべく多数の同窓生に読んで貰えるようにしたいと考えている。

(終)